

# 小笠原諸島返還 50 周年記念シンポジウムを開催しました。

平成30年5月24日（木）、東京都議会議事堂1階 都民ホールにおいて、「小笠原諸島返還50周年記念シンポジウム」が開催され、有識者の方々による、基調講演、並びに今後の小笠原諸島の振興策等に関するパネルディスカッションなどが行われました。当日のシンポジウムには、250名の方々にお越しいただきました。誠に有難うございます。

また、5月24日（木）から30日（水）まで、都議会議事堂1階の都政ギャラリーにおいて、小笠原諸島に係わる研究資料、写真、特産品等に関するパネルの展示、観光案内等の資料などを配布いたしました。

## 1 小笠原古謡の披露

小笠原古謡の唄い手・Okei さんにより、小笠原で伝承されてきた歌謡3曲（レモン林など）を披露しました。



## 2 主催者挨拶

シンポジウムの開会に当たり、小池百合子東京都知事から、以下の通り挨拶を行いました。

・小笠原は自然の素晴らしさだけでなく、我が国の排他的経済水域の約3割という、広大な海域を確保する海洋拠点として、国家的な役割を担っている。

・返還以降、復興・整備は着実に進展したが、抱える課題は依然として多く、一層の振興が必要である。

・今回のシンポジウムを契機として、皆様に、小笠原の歴史や文化、地理的重要性について、理解を深めていただき、島の更なる発展を考える、よい機会になればと思う。



## 3 小笠原諸島 PR 大使任命式

小笠原諸島の魅力を全国に広く情報発信し、観光の活性化など島の一層の振興を図るため、「小笠原諸島 PR 大使」として、東京海洋大学名誉博士・客員准教授のさかなクンを任命しました。

任命式では、小池百合子東京都知事から任命書が、森下一男小笠原村村長から大使のタスキが渡され、さかなクンからは、小笠原の自然の魅力などに関するコメントがありました。



## 4 ガイダンス

首都大学東京都市環境学部の菊地俊夫教授から、以下の通り、「小笠原諸島の概要、振興開発とその取り組みを中心として」をテーマとしたガイダンスが行われました。

- ・小笠原諸島は、本土とミクロネシアのほぼ中間に位置すること、我が国の排他的経済水域の3割を確保する拠点となっていること、また、大陸と陸続きになったことがない非常に豊かな自然を抱える海洋島であることなどが主な特徴である。

- ・主要産業の一つは観光業であり、今後は適正な規模とされる年間約3万人程度の観光客の受入数を維持しつつも、付加価値を高めて一人当たりの観光消費額を如何に拡大するかが課題である。

- ・具体的には、小笠原ならではの食文化や歴史、豊かな自然などを観光とつなぎ合わせ、農業や水産業の発展にも寄与するような、付加価値向上のための仕組みづくりを考える必要がある。



## 5 基調講演①

明治学院大学社会学部の石原俊教授から、以下の通り、「小笠原諸島が歩んできた特異で複雑な歴史」をテーマとした講演が行われました。

- ・小笠原諸島は19世紀前半、捕鯨船の寄港地として脚光を浴び、世界中から様々な境遇、目的を持った「移動民」が上陸し発展を続けた。

- ・当初の約半世紀間は、どの国家にも属さない自立空間のような地域であったが、明治維新後、日本政府は諸外国に領有を認めさせ、先住者を日本に帰化させるとともに、北海道入植政策をモデルとして小笠原への入植を開始した。

- ・1930年代からは、温暖な気候を活かして野菜を冬場の京浜市場などに出荷するなど多くの利益を上げ（その他、中硫黄島ではココ栽培が行われココイン精製の一大産地であった。）、非常に豊かな黄金期と言ふべき時代を築き上げた。

- ・しかしこの黄金期は、同時に軍事化の時代でもあり、1920年代以降、小笠原諸島の軍事化が進み、1944年には島民約7千人が強制疎開させられるに至り、人々は長年築き上げてきた生活や産業の基盤を根こそぎ奪われた。

- ・また戦後は、米国の施政権下のもと欧米系島民のみ帰島が許され、1968年の返還まで多くの島民が帰島できず、また硫黄島は返還後も自衛隊の管理下におかれ未だに帰島が許されていないなど、小笠原諸島の人々の立場は分断されてしまう形となった。

- ・一方、占領下の小笠原では米軍施設以外の開発が行われず自然破壊が進まなかったことが、皮肉にも後年の世界遺産登録に繋がった。



## 6 基調講演②

東海大学海洋学部の山田吉彦教授から、以下の通り、「海洋資源保全等の面において小笠原諸島が果たす役割」をテーマとした講演が行われました。

- ・中国やロシアなどの船が世界と行き来するためには、必ず日本列島を横切る必要がある。
- ・地政学的に、日本列島が持つ土地の力は非常に強く、その日本列島を遠巻きに、要のように守る位置にあるのが小笠原諸島である。
- ・一方、我が国の排他的経済水域の約3割を構成する広大な小笠原の海には、豊富な水産資源のほかメタンハイドレードや希少金属が溶け込む海底熱水鉱床などが存在している。
- ・海洋資源を巡る紛争が国際的に絶えない中で、豊かな海洋資源を抱える小笠原の海をしっかりと守るためにも、特に本土の人々は、島に暮らし、島を見て守っていただいている人々に感謝し、島の人々が、潤い、幸せに暮らせる術を考え続ける必要がある。
- ・このためにも、小笠原が抱える魅力的な水産資源や世界中の人々が憧れる環境などを活かして、新しい「メニュー」を開発・提供するなど、観光資源としての付加価値を高めるなどの振興策を考えることが重要である。



## 7 パネルディスカッション

振興策などをテーマにした後半のパネルディスカッションでは、小笠原村森下村長から、小笠原が抱えるアクセスの脆弱性等に関する課題等に関する報告が行われ、その後、出席者によるディスカッションが行われました。

### (1) 森下村長による報告

- ・本土と小笠原を結ぶアクセスは、6日に1便程度の所要24時間を要する船便のみ。このため、船の運航スケジュール上、村民は内地で一つの用事を足すために、最低10日程度費やしている。また、内地の市場動向等を踏まえた出荷が難しいなど、大きな制約がある。
- ・豊かな自然を保全・保護し、利活用することが小笠原発展の肝。観光が活性化することで、農水産業などの一次産業にも良い効果が出ている。今後とも、島民の生活と自然の保全・保護の両立を図っていく必要がある。
- ・数年前のサンゴ密漁事件の際には、夜間、煌々と明かり照らした大船団が沖合に展開するなど、島民の間に、安全・安心の確保に関して不安が広まったことは記憶に新しい。今後とも、小笠原諸島の立ち位置、国境離島で暮らしているという意識を持って、生活することが重要であると認識している。



## (2) ディスカッション（主な意見等）

### ○菊地教授

- ・小笠原振興の肝は観光。子供から高齢者まで、様々な世代が楽しめるツアーやオプションメニューを開発し、インバウンドの取り込みや修学旅行先としての選定など、より多くの方々に来てもらい、楽しんでもらうための「仕掛け」を考える必要がある。
- ・小笠原の水産物や農産物、環境保全のための取組、島民の生活や文化など、これらを巧く連携・組み合わせることにより、小笠原の観光を一層活性化することが可能になる。
- ・返還から50年を経たこれからは小笠原自身が攻める番。小笠原の地勢学的な位置、抱える資源や文化等を活かした、小笠原ならではの政策を立案し、小笠原の重要性、存在意義を内外に示していくことが重要である。

### ○石原教授

- ・戦前の南洋航路のように、年1便でもサイパン、グアムからの便などを検討できれば夢は広がる。
- ・自然に関するツアーが充実している様に、今以上に小笠原の歴史や文化に関しても発信力を高めることが可能になれば、多くの良質の観光客を呼ぶことが可能になる。
- ・74年間帰島できない硫黄島旧島民のことは忘れてはならない。旧島民の方々の高齢化が進む中で、関係機関が連携して、旧島民の方々の労苦に報いる必要がある。

### ○山田教授

- ・島を豊かにするためには、腕利きの漁師、環境保護を実践する方々、英語を流暢に話す欧米系の方々など、島内の豊かな人材を活用することが重要である。
- ・小笠原の魚の出荷は、内地へのアクセスがネックとされているが、昨今の技術の向上等を踏まえ、熟成させた魚を出荷するなど、小笠原の土地ならではの商品価値を高める手法を考え、実行する必要がある。



### ○森下村長

- ・かつて硫黄島では、2万人を超える兵士の方々や島民の方々が多数亡くなり、遺骨収集は現在も行っている。このことは、多くの方が知らないし、村内でも知らない人が居る。
- ・今回のシンポジウムを通じて、小笠原に関心を持っていただいた方も多いと思う。小笠原関連の文献を探し、読んでいただき、小笠原が歩いて来たこの特異な歴史というものを、多くの皆さんに知ってもらいたい。